

文化共生学、映像文化、英米文化、心理学、芸術学美術史

文学部で5つの新専修が4月からスタート

～加速する社会や文化の変化に対応するダイナミックな学部改革から生まれた専修～
グローバル化と情報社会において多面的な視点と思考力、表現力を持つ人間育成を図る

関西大学文学部では、2006年度から「文化共生学専修」「映像文化専修」「英米文化専修」「心理学専修」「芸術学美術史専修」の5つの新専修がスタートします。

新たにスタートする5つの専修では、

文字以外の図像、映像、表象について文化的解釈を取り扱うこと

現場での調査と実見を重視するフィールドワーク手法を導入

文化の持つ社会的・実践的な価値について政策学的視点も考慮すること

を主な柱としています。

グローバル化、情報化する社会において、かえって知識が画一的で一面的になる傾向が見られるなか、さまざまな情報を読み解き、多面的な視点で考え、その考えを言葉で表現できる人間の育成を図っていきます。

社会の変化がますます加速する状況にあって、文学部においても人文学分野の学問の領域が広がり、学習のニーズも多様になってきています。こうしたなか、新領域の研究分野を教育の中に積極的に組み込んでいくために、2004年度には、8つあった学科を「総合人文学科」の1学科に統合し、2つの新専修を加えて1学科10専修制に移行する改革を行いました。

また、文字で書かれた書物の「読解と解釈」を学問の基礎としてきた文学部のスタイルに加えて、現場を重視する教育スタイルを充実させました。

こうしたダイナミックな改革により、新たな専修を柔軟に設置するとともに、文学部の本来の姿「人間と文化に関わる学問」として、総合的かつ学際的な研究に実践的に取り組み、多面的な思考力と表現力を持った人間育成を目指しています。

さらに、2006年度からは、必修科目を最小限にするカリキュラムに移行。学生が自己の興味や関心にしたがってカリキュラムを自己設計できる、きわめて自由な科目履修を実現しました。

なお、今年度からスタートする5つの専修の主な内容は、次ページのとおりです。

【この件に関するお問合せ先】

関西大学 総合企画室広報課 / 鶴丸、北谷

〒564-8680 大阪府吹田市山手町 3-3-35 TEL:06-6368-0075 FAX:06-6337-7078

<http://www.kansai-u.ac.jp>

文化共生学専修 ~異なる文化を認めながら競争的な「共生」の道を探る~

グローバル化が進み、テロや戦争、宗教対立、文化摩擦が絶えないなか、異文化の「差」を認めながら、競争的に共生していく道を探ることが文化共生学専修の目的。

差別意識や宗教観、イデオロギー、文化の違いからくる衝突について、単なる共存ではなく相互理解に基づく共生のための解決策を模索することに焦点をあてた教育を行います。

異文化共生論(サブカルチャー論など) 比較文化論、文化表象論、ジェンダー論、マイノリティ論を柱に、多様な文化を容認し、「創造的共生」に対して、みずから積極的・能動的に考え、行動する人間育成を図っていきます。

映像文化専修 ~国内でも初めてといえる映像研究(フィルム・スタディーズ)を実践~

日本と海外の双方の高等研究機関で映像研究に従事した経歴を有する専任教員による、国内でも初めてといえるフィルム・スタディーズを実践していきます。

多種多様な映像が氾濫するなかで、専門的かつ複眼的な見地から映像を批判的に読み解く能力を磨くことが目的です。

アメリカ、ヨーロッパ、東アジアという三つの文化圏の映像文化を学ぶことで映像文化の地域横断的な広がりを感じ、特定地域の映画の文化的背景や、映像文化研究に有用なさまざまな理論的ツールの習得、映像文化を取り巻く社会的制度や文化的な活動への理解を深めていきます。

心理学専修 ~地域での心理的支援活動を実際に行い、解決策を導き出すことが目的~

従来の教育学専修心理学コースのカリキュラムを継承し、地域実践心理学を組み込んだ専修。実験心理学を始めとして、発達心理学、認知心理学、教育心理学、臨床心理学、性格心理学などをカバー。実験・実習を基礎とする実践的なカリキュラムで心理学の全般を学びます。

学校、家庭、病院、福祉の現場における心の問題が重視されるなか、地域における心理的支援活動を実際に行うことで、潜んでいる問題の解決策を導き出すことが目的。

文学部の心理学では、知覚・思考・言語・認知等の実験的手法の心理学を基礎に、発達・臨床・教育等の場面への応用を志向しています。

英米文化専修 ~英語圏の文化を横断的・学際的に研究するカルチュラル・スタディーズ~

アメリカ、イギリスを中心とする英語圏の「文化」を横断的・学際的に研究。音楽や映像、建築、アメリカニゼーションに関する国際研究も含まれます。

英米文化を知ることに加え、世界に与えた影響までを網羅することで、「文化を視る目」の獲得を目指すとともに、実用的な英語運用力の向上も目標としています。

表面的にはグローバリゼーションが急速に進展しているように見える一方で、ローカルな場では文化的な対立が激化し、混迷する21世紀の世界において、系統的に文化研究の手法が習得できるようにしていきます。

芸術学美術史専修 ~芸術作品を鑑賞する方法を学び、芸術・美を理論的・実証的に追及~
哲学専修の1コースだった美学・美術史コースが新専修として独立。「芸術とは何か?」「美とは何か?」という問いかけを、理論的・実証的に追究していきます。

日本や中国、そして西洋の建築、彫刻、絵画、工芸・デザインなどの美術作品、演劇、映画、写真、音楽など多岐にわたる芸術作品を研究対象にし、美術史の基礎概念の習得とともに、芸術的制作の意味、芸術作品を「見ること」の意味を多角的に研究していきます。

とりわけ、日本と西洋の美術史学や演劇論の研究はもっとも力を入れている領域のひとつです。また、本学の立地を活かし、京都や奈良、そして大阪など、各地で開催される数々の展覧会や社寺の見学に出かけ、実際に作品を前にして鑑賞の方法を学べることが大きな特徴です。

参考:関西大学文学部の改革について

関西大学文学部では、学部内組織の改革、採用人事の改革の実施、大学と社会との連携の推進(2002年10月~2004年9月)、「新しい人文学の拠点」を目指した新専修の設置、社会連携の強力な推進、研究の充実に向けた取り組み(2004年10月~2006年9月)といった方針に基づき、あまり例のないスピードと規模で一連の改革を行ってきました。

なお、2006年度の入試では、志願者が1万4795人(前年比43%増)に達して、文学部としては全国一の志願者数となりました。

<改革の主な内容>

2002年度後期から

- ・高大連携事業のスタート(教員向け研修講座)
- ・学校インターンシップ・プログラム
- など

2003年度

- ・新規人事採用制度の改革(公募制の採用、後任補充の廃止、透明性の確保)
- ・文学部プレステュUDENT・プログラムの導入
- ・副専攻:LSA(法科大学院進学)プログラムの設置決定
- ・専門科目として「日本伝統芸能史」(担当:林家染丸師匠)
- ・高大連携事業の開始
- ・文学部の高大連携高校担当制度の新設
- ・吹田市、高槻市との包括協力協定の推進
- など

2004年度

- ・1学科10専修制度の導入
- ・初年次導入教育(「学びの扉」(入門講義型)「知へのパスポート」(入門演習型)「知のナビゲーター」(フレッシュマンセミナー型))の整備
- ・小学校教員希望者支援講座の開設
- ・関西大学大学院における飛び級入学試験制度導入への対応
- ・関西大学重点領域研究「学校インターンシップの可能性と課題」の展開
- ・10の教育委員会との連携協力協定締結
など

2005年度

- ・人文学の新領域を教育・研究に組み込む「テーマ・プロジェクト」教育の開始
- ・連携講座「教職の実際」(大阪府教育委員会との連携)の開設
- ・総合講座 日本学「笑いの人間学」(桂三枝客員教授)の開設
- ・寄附講座「マロニエ提供 ファッション学」の開設
- ・FM802によるプレゼンテーション講義の実施
- ・私立大学学術研究高度化推進事業で文学部教員を中心とするプロジェクト3件採択(人間活動理論研究センター、アジア文化交流研究センター、なにわ・大阪文化遺産学研究センター)
- ・「学校インターンシップ」が特色GPに採択
- ・身体運動文化専修と吹田市健康づくり推進事業団との連携協力の覚書締結
- ・りそな銀行の取引先対象の連続セミナーの開設
- ・財団法人社会開発研究センターとの連携協定締結
など

2006年度(予定)

- ・昼夜開講制を廃止し、「デイトムコース」と「フレックスコース」を統合
- ・学部意思決定システムの改革
- ・新専修の設置(英米文化、芸術学美術史、心理学、映像文化、文化共生学)
- ・大規模なカリキュラム改革:カリキュラムの「体系」から「設計」へ
- ・学部と大学院の相互乗り入れカリキュラムの検討
- ・連携講座「吹田学」(吹田市)の開設
- ・2007年度の新専修として「比較宗教学専修」と「地理学・地域環境学専修」の2専修の設置を決定
など